

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 氏 名：長瀬 智寛（ながせ とむひろ）
- (2) 年 齢：29 歳
- (3) 参加事業：「世界青年の船」事業（2017 年）
- (4) 職 業：オルタナティブ・スクールあいち惟の森



■ 応募の動機

動機の一つ目は、まだ知らない考え方や生き方を持っている仲間に出会い、今後の暮らし方の参考にしたいと思ったからです。二つ目は、カウンセリングの経験値を増やしたいと考えていました。応募当時、カウンセリング職に就いていたので、船上で参加青年の話を聞き、参加青年が納得いく答えを導き出すために、多くの時間を割きました。日本も含め 11 か国の参加青年の考え方や生き方に触れ、刺激を受けました。

■ キャリアパス、スキル向上にプラスになったこと

事業で出会った各国青年と議論していく中で、これまでに**思いもしなかった価値観と考え方**を知り、「差異」をリアルに感じました。私は参加当時も現在も教育という答えのない仕事をしていますが、多様な差異に触れたことで、既存の価値観や考え方に囚われないように意識しながら探求することができています。**オルタナティブ・スクール**、通称もう一つの学校という現在のキャリアにもつながっていると考えています。

特にプラスになったプログラムは、ボランティア・アクティビティです。提供されるプログラムとは違い、自分の経験やスキルに価値を生み出し、他の参加青年にシェアすることができるからです。日々のプログラムで大量のインプットしながら、自分の価値を自分で決め、アウトプットする時間を作る。インプットをアウトプットにすることを習慣化するきっかけになっています。

「思いもしなかった価値観と考え方」とは具体的にどのようなことでしたか。

「世界青年の船」事業（以下、SWY）に参加する前は、フィジーの語学学校で勤務していました。留学業界に勤める者として、フィリピン、カナダ、アメリカなどに加えて、南アフリカ共和国も英語を学ぶ留学先の一つであることは知っていました。私が参加した 2017 年の SWY には南アフリカの青年がいたので、大学の授業や語学学校の様子についてはよく話を聞きました。南アフリカには、大学での専門の授業以外に日本で言ういわゆる「おばあちゃんの教え」のようなものの影響が大きいらしく、例えば、心の持ちようとか、人の生き方、愛とは何か、生と死などについて学ぶというのです。語学だけでなく、人間のもっと根幹の部分である精神論のようなものを学べる場として、南アフリカ共和国が良いということを南アフリカの青年が教えてくれました。日本人にとっておもしろいテーマではないかと思ったので、「スピリチュアル留学」と名付けてみました。このように船上では私が全く知らなかった価値観に基づいて南アフリカのプレゼンスをアピールしてくれた青年に出会えました。

「オルタナティブ・スクールあいち惟の森」で大事にしている価値観や考え方とはどんなものですか。

僕自身がオルタナティブ・スクールについて説明するときには『「教えないこと」を教える学校です』と言っています。教育業界では、「主体的な学び」とか「探究」とか「アクティブラーニング」といった言葉がよく使われていて、子供たちが自分で考えて選択できるようになることを重要視しています。「オルタナティブ・スクールあいち惟の森」でも、これらを大切にしています。実際、公立学校にある「時間割」は存在せず、時間割は子供たちが自分で作ります。子供自身が目標を立てて、その

目標達成に必要なことを自分なりに考えてこなしています。自分で考えて決断するという機会を日常の小さな事柄から増やしていくように心がけています。

今日は学校で「サンタクロースはいるのかいないのか」という議論をしていました。一人の生徒が「データに基づくサンタクロース理論」を展開していました。もし、サンタクロースがいるとしたら、どれくらいの人数のサンタクロースが必要で、荷物は何トンになって、その何トンの荷物をトナカイで運ぶには、トナカイが 80 万頭くらい必要で・・・物理的にそんなにたくさんの荷物を運べないから、サンタクロースはいないと結論付けていました。答えが正しいかどうかではなく、自分の意見を論理的に説明できるかどうかを大切にしています。

船上ではどんなボランティア・アクティビティをしましたか。

PY セミナーで「幸福の探求」という話をしました。ライフスタイルとキャリアの視点から自分の幸せを再発見するセミナーで、フィジーの文化に基づく話をしましたが、ボランティア・アクティビティでは、PY セミナーでは話せなかったことを中心に話しました。



SWY の仲間と共に（本人左端）

■ 民間等が主催する事業や留学と異なる点

内閣府事業に日本代表参加青年として参加するという意識です。一つの事業で、多国籍かつ多種多様な仲間と深い関係性が構築できます。事業関係者の縦と横とのつながりができることも魅力です。

縦のつながりを強めるために何ができると思いますか。

事業参加をきっかけとした事後活動で、パラ卓球のボランティアに関わるようになりましたし、愛媛県にいた時は愛媛県 IYEO の会長をさせていただきました。内閣府のプログラムは、事業後に参加できる組織があるのが特徴だと思います。そういう輪に入ることによって、縦のつながりが強化されたと思います。

縦のつながりで得られたメリットは何でしょうか。

パラ卓球のボランティア（IYEO パラスポーツ振興チーム）では国際大会概要の翻訳業務があつて、チームメンバーで分担しました。この翻訳作業を生徒たちと一緒にやってみたことがあります。もちろん、小中学生には難しすぎる内容なのですが、2020 年夏の国際的大会もあつて、パラスポーツはタイムリーな話題ですし、自分自身が携わっているボランティア活動の紹介ができてよかったと思っています。子供たちの普段の生活ではオリパラの大会概要など見ることはありませんので、珍しい体験だったと思います。「パラリンピックをどのようにとらえるか」といった観点から皆で話し合い、科目でいうと「社会」のような授業を行うことができました。

■ 現在のキャリアパスに与えた影響

事業参加の経験を地域教育やオルタナティブ教育の現場に還元することによって、現場で**重宝される**ことが多いです。そのため、異なる教育現場へのキャリアが開かれやすいと思います。また、船内活動で特にプラスになったと感じているのは、ボランティア・アクティビティです。この活動では、船という小さな世界で寝食を共にしている一人一人が、自らの価値をシェアすることになります。それは、事業参加後に地球という大きな世界で暮らしている一人として、船内と同じように**自らの価値をシェア**することで、**社会をよりよくするという意識の形成**につながったと思っています。

具体的にどんな場面で「重宝され」ますか。

先ほどお話したオリパラの翻訳業務を英語や社会の授業で活用したことや、内閣府事業でできた外国青年とのつながりを活用して、学校の授業内でペルーの青年に話をしてもらったり、スペインの青年とスペイン語で会話してみたりということができました。ペルーの青年には、異文化理解の時間を活用して、ペルーの言語、時差、食べ物、観光地の話をしてもらいました。

ご自身の価値をシェアして他の青年から新たな価値観を得た等のエピソードがありますか。

例えば、私のフィジーでの体験は、私が発表しなければ、とりわけ価値があるものではないでしょう。でも、私がアウトプットすることで、フィジーの文化や幸福に関する考え方に興味を持ってくれる人が出てきます。その結果、感化されたり、合意形成されたりすることになります。アウトプットするからこそ価値が生まれるということが非常に重要です。船上でも様々なボランタリー・アクティビティがありました。オークションをやりましょうとか、アラビア語を教えますとか、これまでの自分の海外体験について語り合いましょうとか、何でもありました。ボランタリー・アクティビティとして何でもできると思うのですが、アクティビティをすることによって価値が生じ、その価値に魅力を感じる人が出てきて、その結果新しい価値が生まれて、また次のアクティビティが出てくるというようにつながっていくのです。

同じことが学校や会社でも言えると思います。指示されたことをこなすことも大切ですが、それ以外のことを価値として周りに提供できることは非常に重要なポイントだと思います。自分の持っている価値を提供し続ける仕組みを作ることが大切です。船の中は小さな世界で、自分の価値をどんどんアウトプットすることに集中できる環境でした。船上では、自分にとって価値があると思うことを積極的にアウトプットすることが前提条件になっていました。皆がそのことを理解してプログラムに臨んでいましたから、自分の価値を探し出して、その価値を「見える化」して、アウトプットするという流れに巻き込まれていくのがなんだか心地よかったのです。この環境こそが SWY の最大の魅力でした。

事業に参加したことをきっかけに関心を持つようになった社会問題がありますか。

日本の子供たちは自己肯定感が低いというデータがあります。自分で選択するという体験が、自己肯定感を高めるための方法の一つではないかと考えています。人に言われてやらされて失敗すると後悔が大きくなります。自分で考えて選択して失敗したのなら、あきらめがつくというか、ある意味、自分で決めたことだからと割り切れるはずです。

船で出会った人たちは、自己肯定感の高い人たちが多かったように思います。船上でのボランタリー・アクティビティは、自己肯定感が低いとできない活動です。自分のしたいことを自分で選択して自分で行動を起こせるようになってほしいと思います。日本で生まれ育つ子供たちが SWY の参加青年のような雰囲気を出せるようになるのが願いです。

■ 船を用いた国際交流の強みとは

船を小さな世界と見立て、**高速に PDCA を回す**ことができることだと思います。この最たるものがボランタリー・アクティビティだったと感じています。例えば、何かの話をしようとか、一緒にご飯を食べようとか、好きなアーティストについて話そうといったことも、私は PDCA だと思っています。失敗を恐れない雰囲気があるからこそ、自分のやりたいことをどんどん計画して、実際にやってみて・・・というのを繰り返す日々でした。今ではもう思い出せないような小さな出来事も、船の上ではすべて PDCA サイクルにつながっていたように思います。

■ 事後活動について

事業後、愛媛県青年国際交流機構（愛媛県 IYEO）で会長を 2 年務めました。また、IYEO パスポート振興チームやグローバルリーダー創出プロジェクトでも活動しています。

事業参加後に縦のつながりが増え、多様化しました。事業参加者ということにつながり、様々な活動に出会う機会が圧倒的に増えました。情報にアクセスできるようになった分だけ、社会貢献する機会が拡大したように感じています。



愛媛県青年国際交流機構で活動していた頃

事業後に参加された社会貢献活動がありますか。

IYEO 関連の活動は先ほど述べた通りですが、それ以外では愛媛にいたときに農家の支援をしていました。ミカンなどの柑橘類は大量の廃棄が出ます。おいしく食べられるのだけど、売り物にはならない。農協を通して販路を確保している場合、出荷数があらかじめ決まっていますので、その数を上回った分は売ることができないのです。個人販路を見つけて売るなどするしかありませんが、自力で開拓するのは大変です。ですから、あきらめて処分してしまう農家が非常に多いのです。素人目には非常にもったいないので、安く買い取って友人たちなどに分けたりして、ささやかながら大量廃棄に至らないように支援していました。

■ 今も続いている国際的・人的交流

教育機関などで世界各国の文化を紹介する機会や学びの時間では、オンラインでつなぎ、交流しています。直接会うことは難しいですが、SNS を通じて、事業参加時に感じた差異を常に共有し、アップデートしてくれます。

内閣府の事業も含め、国際交流におけるオンラインの活用に関して、何か提案がありますか。

難しい質問ですね。一昨日、SWY の同期の友人と話していたのですが、オンラインよりはオフライン、対面のほうがいいというのは皆さんが感じていることだと思います。でも、今はオンラインしかできないという状況も理解できます。去年と今年はオンラインで事業を実施するけれども、10 年後にはオフラインでリユニオンをするという設定があれば、参加者にとって一つのモチベーションになるのではないのでしょうか。

長瀬智寛氏プロフィール

幸福留学、海外就職、地域移住を経て、「生きる」を探求する学校オルタナティブ・スクールあいち惟の森担任スタッフ。愛知県生まれ、南山大学総合政策学部卒業。哲学に触れたこときっかけに、幸福の秘訣を探るために旅に出る。最も尊敬する方の誘いを受け、世界幸福度ランキング 1 位（2016/2017）のフィジー共和国にある語学学校に就職。スチューデントカウンセラーとして 2 年間で 665 件の相談に向き合う。その後、内閣府青年国際交流事業「世界青年の船」事業（平成 29 年度）への参加を機に帰国。生まれ育った日本で自分に合った学びの環境を求める子どもたちと共に「生きる」と「暮らす」を探求している。